

ダニエル書 - 第六十八号

エゼキエル書8章の預言的メッセージを解き明かす：日曜法と終末時代

Jeff Pippenger

2024-02-01

エゼキエル書第八章は、聖書の中でも最も理解しやすい預言の章の一つです。この章には明確な始まりがあります。

第六年、第六の月の五日に、私が自分の家に座っており、ユダの長老たちが私の前に座っていたとき、主なる神の御手がそこで私の上に臨んだ。エゼキエル書 8章1節。

その幻は第十一章で明確な結末を迎える。

その後、霊が私を引き上げ、神の霊による幻のうちに、カルデヤにいる捕囚の者たちのところへ私を連れて行った。こうして、私が見ていた幻は私から去っていった。そこで私は、主が私に示されたすべてのことを捕囚の者たちに語った。エゼキエル書 11:24、25。

第八章の幻は、第六年の第六の月の第五日に始まり、日付に「666」が並ぶ第六年の第六の月の第六日のちょうど前日である。案の定、その幻は獣の刻印である日曜法についてであり、その数は「罪の人」の数であるとともに、七つに属する第八の王国の数でもある。「666」という数に打ち勝つ者たちは神の印を受け、第九章では、その神の印が終わりの時代の神に忠実な民に押されている。

また私は天に、もう一つの大きい驚くべきしるしを見た。終わりの七つの災いを持つ七人の天使である。というのは、それらによって神の怒りが完了するからである。私はまた、火と混じり合ったガラスの海のようなものを見た。そして、獣とその像とその刻印とその名の数に打ち勝った者たちが、神の豎琴を手にして、そのガラスの海の上に立っていた。彼らは神のしもべモーセの歌と小羊の歌を歌って言った。「主なる全能の神よ、あなたのみわざは大いにして驚くべきものです。聖徒たちの王よ、あなたの道は正しく、真実です。」黙示録 15:1-3。

恵みの時の終わりの直前に（というのも、最後の七つの災いを携えた七人の御使いが黙示録の次の章で神の怒りを注ぎ出すからである）、神の終末の民が見分けられる。彼らは四つのものに打ち勝っている。「勝利」と訳されている語は、征服することを意味する。忠実な者たちは、獣、獣の像、獣の刻印、そしてその名の数に打ち勝った。この勝利には、これら四つの象徴が何を表しているのかを彼らが理解しているという事実も含まれている。これら四つの預言的象徴が実際に何を意味するのかを知っている人は、ごくわずかな割合にすぎない。

世界はかつて、教皇制が第十七章のバビロンの淫婦であることを知っていた。だが、神の御言葉が指摘しているとおり、地の王たちと淫行をするツロの淫婦に関する理解は、アメリカ合衆国の歴史の中で忘れ去られてきた。獣に勝利を得るとは、聖書の預言の獣が教皇制であることを見極めるために、真理の言葉を正しく分けることを意味する。まさに次

の章では、竜と獣と偽預言者が世界をハルマゲドンへと導き、終わりの日の神の忠実な者たちは、その三つの勢力が誰であることを知らなければならない。

第六の御使いはその鉢を大いなるユーフラテス川に注ぎ出した。するとその水は枯れた。これは、東の王たちのために道が備えられるためであった。私は、蛙のような三つの汚れた霊が、竜の口から、獣の口から、偽預言者の口から出てくるのを見た。彼らはしるしを行う悪霊であって、地上の王たち、すなわち全世界の王たちのもとへ出て行き、全能の神の大いなる日の戦いに彼らを集めるのである。見よ、わたしは盗人のように来る。目を覚まし、自分の衣を守る者は幸いだ。そうすれば、裸で歩くことにならず、その恥を見られることもない。そして彼らは、ヘブライ語でアルマゲドンと呼ばれる場所に集められた。ヨハネの黙示録 16:12-16。

獣に対する勝利とは、獣が何者であるかを正しく理解することこそが勝利である。先に引用した箇所は、目を覚まして自分の衣を保つ者に祝福を宣言している。しかし、第六の災いの時点では、すべての人に対する恵みの期間はすでに完全に閉じられている。ミカエルが立ち上がると、人類に対する恵みの期間は閉じられ、その後、最後の七つの災いが注がれる。恵みの期間が閉じられた後に衣を着替えることはできない。それでも、第六の災いには警告が伴っている。その警告は、恵みの期間が閉じる前に獣について正しい理解を持つことに関わっており、もしその理解を持っていなければ、恵みの期間が閉じる前にキリストの義の衣を失うことになる。

言葉の理解に混乱し、反キリストの意味を見ることができない者は、必ずや自らを反キリストの側に置くことになる。今や、私たちが世と同化する余裕はない。ダニエルは自分の分と自分の場所に立っている。ダニエルとヨハネの預言は理解されるべきである。両者は互いに解き明かし合う。これらは、誰もが理解すべき真理を世界に与える。これらの預言は世において証しとなるべきものである。終わりのこの時代にそれらが成就することによって、それら自体が自らを説明することになる。クレス・コレクション、105。

もし人が反キリストが教皇制であることを理解しなければ、その人は結局教皇制の側に立つことになり、あるいはヨハネが書いたように、裸で歩き自分の恥を現すことになる。獣に対して勝利を得るといえるのは、その獣が教皇権であること、そして教皇権について明らかにされているすべてを理解することを意味する。勝利を得て、教皇制が不法の人であると理解する者たちは、教皇制の像が、教会と国家の結合という原理、しかもその関係を教会が支配するという原理を表していることを理解する必要がある。

ダニエル書において、すなわち教会と国家の結合である獣の体制は、「荒廃をもたらす背き」として示されている。背きは罪であり、ローマ教皇制の獣を形作る罪とは、諸王が自らの権力を教皇権に譲り渡すときである。こうして彼らは霊的な姦淫を犯し、それがダニエルの言う「荒廃をもたらす背き」であり、またヨハネが言う「獣の像」である。

教皇の像に打ち勝つこととは、神の御言葉を通して、アメリカ合衆国がまずこの関係を形成し、間近に迫る日曜法によってそれを確定し、その後、全世界に同じ関係を受け入れるよう強制するのだと理解することである。

米国が地上に強い政教一致は、世界統一政府（国際連合）が、この取り決めにおける支配的勢力である教皇権と同盟を結ぶことから成っている。獣の像に打ち勝つこととは、神の預言の言葉によって、獣の像がまさにこれらの事柄を表しているとして理解することである。

獣とその像に打ち勝つことには、獣（教皇制）の権威のしるしを理解することが含まれる。

獣の刻印とは、日曜日を神の安息日として守ることを強制することである。この刻印に打ち勝つには、日曜礼拝は太陽崇拝であり、異教のバル崇拝に他ならないことを理解する必要がある。勝利には、獣の刻印はそれが人々に強制されるまでは誰も受けないという真理が含まれている。

しかし過去の世代のクリスチャンたちは、そうすることで聖書の安息日を守っているのだと思い込み、日曜日を守っていた。また今日でも、ローマ・カトリック教会をも例外とせず、どの教会にも、日曜日が神による制定の安息日であると誠実に信じている真のキリスト者がいる。神は、彼らの志の誠実さと御前における正直さを受け入れておられる。だが、日曜遵守が法律で強制され、真の安息日の義務について世界が啓発されるときには、ローマの権威を超える権威を持たない掟に従うために神の戒めに背く者は、そのことによって神よりも教皇制を崇めることになる。彼はローマと、ローマが制定した制度を強制する権力に服従し、これを崇敬している。彼は獣とその像を礼拝している。そのとき、人々が神がご自身の権威のしるしであると宣言された制度を退け、その代わりにローマがその至上性のしるしとして選んだものを重んずるなら、彼らはその結果、ローマへの忠誠のしるし-「獣の刻印」-を受け入れることになる。そして、このように問題が人々の前に明白に示され、彼らが神の戒めと人間の戒めのいずれを選ぶかに迫られるに至って初めて、なおも背き続ける者たちは「獣の刻印」を受けるのである。『大いなる論争』449頁。

獣、獣の像、獣の刻印に打ち勝つ者は、その名の数にもまた打ち勝たなければならない。ツロの淫婦が忘れ去られていなかった時代には、プロテスタントの世界は教皇制が反キリストであることを知っていた。彼らは、パウロが教皇制を「あの不法の者」「罪の人」「不法の奥義」および「滅びの子—すなわち、神と呼ばれるもの、また礼拝されるものすべてに逆らい、それらすべての上に自らを高くし、神として神の宮に座し、自分が神であることを示す者—」と指し示していることを知っていた。しかし今や、ツロの大淫婦は忘れ去られてしまった。

過去の時代には、イソプセフィ、すなわちゲマトリアのさまざまな応用があり、数「666」が象徴的に教皇制を表していることが示されていた。これの古典的な例として、教皇のミトラには Vicarius Filii Dei という語が記されている。Vicarius Filii Dei は「神の子の代理者」を意味し、したがって、神の宮に座して自らを神であると主張するという彼の主張に関わるものである。Vicarius Filii Dei のラテン文字を数に換算すると、六百六十六になる。

教皇権である獣は、その数によって識別され、その数は「666」である。しかし、罪の人は1798年に致命的な傷を負い、忘れ去られてきた。終わりの日にはその致命的な傷が癒さ

れ、その致命的な傷の癒しは、アメリカ合衆国がまず自国において獣の像をつくり、その後、世界にも同じことを行うよう強いることを示している。

世界における獣の像は二重であり、同時に三重でもある。預言的には、教会と国家の結合から成り立つゆえに二重であるが、竜・獣・偽預言者から成るという点で三重でもある。世界をハルマゲドンへと導くまさにその諸勢力の三重の結合が確立されるとき、彼らは七つに属しつつも第八の王国である獣となり、またそれは第六の王国の三重の結合でもある。終末における獣の名の数はい再び「666」であり、それは第六の王国に属する三つの王国を表しているからである。

獣、その像、その刻印、そしてその名の数に対して勝利を得るということは、「第八は七つに属する」という謎を理解することを意味する。これはダニエル書二章の奥義であり、ダニエルがその理解を求めて祈ったものである。これは、ヨハネが「時が近い」と言ったとおり、恵みの時が閉じる直前に封印が解かれるイエス・キリストの啓示の一要素である。このため、その勝利を得る者たちは、災いを注ぐ天使たちと共にある者として描かれている。というのも、彼らは恵みの時が閉じる直前に、その勝利、すなわち必要な預言的理解を得るからである。

イエス・キリストの黙示は猶予期間の終わりの直前に封印が解かれ、その幻の一要素として「666」という数があることを理解している者は、エゼキエル書八章の幻が第六年の第六の月の五日（すなわち六日目の前日）に始まっていることを見逃さないだろう。八章の終わりまでに二十五人の男たちが太陽に向かってひれ伏しており、九章は誰が神の印を受けるかを明らかにしている。

この幻視の背景は獣の刻印と神の印であり、数字「666」によって象徴される日曜法において恩恵期間が閉じられる直前に、この幻視は開かれる。しかし、アメリカ合衆国での日曜法の時に起こるとされる恩恵期間の終わりは、人類全体の恩恵期間の終わりではなく、セブンスデー・アドベンチストだけに適用される恩恵期間の終わりである。

この幻は、セブンスデー・アドベンチスト教会の象徴であるエルサレムの内部で起こるものとして描かれている。米国で日曜法が施行される時には、セブンスデー・アドベンチストは、まさにその時その場で、安息日の光に対して責任を問われる唯一の集団である。

もし真理の光があなたに示され、第四の戒めの安息日が明らかにされ、また日曜日遵守には神の御言葉に何の根拠もないことが示されているのに、なおも偽りの安息日に固執し、神が「わが聖なる日」と呼ばれる安息日を聖別することを拒むなら、あなたは獣の印を受ける。これはいつ起こるのか。－あなたが、日曜日に労働をやめて神を礼拝するよう命じる布告に従うときである。聖書のどこにも日曜日が普通の労働日以外のものであることを示す言葉は一つもないと知りながら、あなたは獣の印を受けることに同意し、神の印を拒むのである。もし私たちがこの印を額や手に受けるなら、不従順な者に宣告された裁きが必ず私たちの上を下る。しかし、生ける神の印は、良心に従って主の安息日を守る者たちに押される。 Review and Herald, 1911年4月27日。

エゼキエル書8章から11章の幻は、エルサレムに対する猶予期間の終結に至るまでの歴史を示している。それは、数字「666」が現れる前日に起こるものとして描写されており、さらに8章は、エルサレム内部での反逆が次第に激化し、ついには指導者たちが太陽を拝

み、その結果、獣の刻印を受けるに至ることを示している。

第九章は、天使がエルサレムを通り過ぎ（こうして進展を示し）、その後に来て印を持たない者を皆殺しにする滅びの天使たちに先立って、ある一群の人々に印を押すことを表している。両方の章は、日曜法へと至る進行的な歴史を表しており、そこでは一方の一群が太陽にひれ伏し、もう一方は神の印を受ける。その後、悪しき者たちはエルサレムから取り除かれる。というのも、日曜法が悪しき者と賢い者を分け隔てるからである。

エゼキエル書9章に示されている封印は、黙示録7章に示されている封印と同じである。

もしこのような場面が到来し、罪ある世界にこれほどまでの恐るべき裁きが下るのだとすれば、神の民はどこに避け所を見いだすのか。憤りが過ぎ去るまで、彼らはいかにして守られるのか。ヨハネは、自然の諸要素-地震、暴風、そして政治的争乱-が四人の天使によって押さえられているさまを見ている。これらの風は、神が解き放てと命じられるまで、抑えのもとにある。そこにこそ、神の教会の安全がある。神の御使いたちは神の命に従い、地の風を押しとどめて、神のしもべたちの額に印が押されるまで、風が地にも海にも、どの木にも吹きつけないようにしている。力ある御使いが東（または日の出の方）から上ってくるのが見える。この最も力ある御使いは、その手に生ける神、すなわち命を与えることのできる唯一のお方の印を持っている。このお方は、不死、永遠のいのちが授けられる者たちの額に、しるし、すなわち銘を記すことのできる方である。この最高の御使いの声こそ、四人の天使に対し、この業が成し遂げられるまで、また彼が解き放てとの召しを与えるまで、四つの風を抑えておくよう命じる権威を持っていたのである。

世と肉と悪魔に打ち勝つ者は、生ける神の印を受ける恵まれた者となる。手の清くない者、心の潔白でない者は、生ける神の印を受けることはない。罪を企て、それを行っている者は、顧みられずに過ぎ去られるだろう。神の御前において、大いなる反型の贖罪日に自分の罪を悔い改め告白する者の立場に身を置いている者だけが、神の保護に値する者として認められ、印をつけられる。救い主の現れを、朝を待つ者よりもさらに熱心に、切に、ひたすら見張りつつ待ち望む者たちの名は、印を受けた者たちのうちに数えられる。真理のあらゆる光がその魂に輝いているのに、公言する信仰にふさわしい行いを持つべきはずでありながら、罪に誘惑され、心に偶像を立て、神の御前で自らの魂を墮落させ、さらに自分と共に罪に加わる者をも汚す者は、命の書からその名を消し去られ、真夜中の暗やみの中に取り残され、そのともしびと共に器に油を持たないままとなる。「わたしの名を恐れるあなたがたには、義の太陽が上り、その翼にはいやしがある。」

「神のしもべたちに施されるこの封印は、幻のうちにエゼキエルに示されたものと同じである。ヨハネもまた、このきわめて驚くべき啓示の目撃者であった。彼は、海と波がどよめき、人々の心が恐れあまり挫けるのを見た。彼は、地が動かされ、山々が海のただ中に移され（これは文字どおり起きている）、その水がどよめき騒ぎ、そのうねりによって山々が震えるのを見た。彼には、災厄、疫病、飢饉、そして死が、その恐るべき使命を果たしているさまも示された。」『牧師たちへの証言』445頁。

黙示録第7章における十四万四千人への封印は、エゼキエル書第9章にも表されており、封印の天使は東から上ってくる最も力ある天使である。命の書から名を消し去られて滅び

る者たちは、「自分のともしびと共に器に油がない」者として表されている。エゼキエル書第8章から第11章の幻に現れる二つの階級は、マタイ第25章の賢いおとめと愚かなおとめであり、したがって彼らはアドベンチストである。

「マタイ25章の十人の乙女のたとえは、アドベンチストの人々の経験も示している。」『大いなる論争』393。

ホワイト夫人は、エゼキエルの幻におけるエルサレムを明確にアドベンチズムと同一視している：

主の働きと魂の救いの精神を心に抱く神の真の民は、常に罪をその真の罪深い性質として見るであろう。彼らは、神の民に容易にまとわりつく罪に対して、忠実かつ率直に対処する側にいつも立つ。とりわけ教会に対する最後の働き、すなわち神の御座の前で非のない者として立つことになる十四万四千人の封印の時には、彼らは神を名のる民の不正を最も深く痛感するであろう。これは、各々が手に殺戮の武器を持つ者たちの姿という象徴のもとに最後の働きを示した預言者の描写によって、力強く示されている。その中に一人、亜麻布をまとい、腰に書記の筆入れを帯びた者がいた。「主は彼に言われた。『この都の中、エルサレムのただ中を通り、その中で行われているすべての忌むべきことのために嘆き叫ぶ者たちの額に、しるしを付けよ。』」Testimonies, volume 3, 266.

エゼキエル書8章から11章の幻視は、日曜法に至るまでの、またその時点でのアドベンチズムの歴史に直接言及している。それはエルサレム（アドベンチズム）の内部にいる二種類の礼拝者を特定し、恩恵期間の終わり直前に封印が解かれるイエス・キリストの啓示と預言的に結び付けられている。というのも、その最初の言及では、預言的象徴として「666」という数が掲げられているからである。こうしてそれは、終末において賢い者たちが勝利を得なければならない四つの事柄の一つを指し示しており、その四つは「第八が『七つのうちの一つ』である」という光の一部である。さらに黙示録15章は、教皇制の四つの象徴的側面に対して勝利を得た者たちが、モーセと小羊の歌を歌うことをも示している。

その日について、イザヤ書27章は、終わりの日の義人たちが「ぶどう園の歌」を歌うと言っている。これは、小羊が人々の間を歩いたときに歌った歌であり、新たな選民が選出される中で見過ごされつつある選ばれた民を識別する歌である。その歌は、エゼキエル書9章と黙示録7章の封印のあいだに、終わりの日の「賢い者たち」によって歌われる。エゼキエル書8章から11章にかけての幻は、まさにその歌の一部である。

次回の記事でこの研究を続けます。

主の働きと魂の救いの精神を心に抱く真の神の民は、罪を常に、その本来の罪深さのままに見る。彼らは、神の民に容易にまとわりつく罪に対して、忠実かつ率直に対処する立場を常に取る。とりわけ教会のための終わりの働き、すなわち、神の御座の前に傷なく立つことになる十四万四千人の封印の時には、彼らは神を公に告白している民の不正を最も深く痛感するであろう。これは、各々が手に殺戮の武器を持つ人々の姿によって終わりの働きを描いた預言者の比喻によって、力強く示されている。その中の一人は亜麻布をまとい、脇に書記のインク壺を帯びていた。そして主は彼に言わ

れた、『町のただ中、エルサレムのただ中を通り、そこにおいて行われているすべての忌むべきことのために嘆き叫ぶ人々の額に印をつけよ』。

今この時、神の会議の場に立っているのは誰か。神の民を名乗る者たちの間にある不正を事実上容認し、たとえ公にはそうしなくとも、罪を戒めようとする者たちに対して心の中で不平を漏らす者たちなのか。彼らに敵対し、過ちを行う者に同情する者たちなのか。決してそうではない。彼らが悔い改めて、働きの重荷を負っている者を虐げ、シオンの罪人の手を支えるというサタンの働きをやめないかぎり、彼らが神の承認という封印の印を受けることは決してない。彼らは、打ち壊す武器を持つ五人の働きによって表されている、悪しき者たちの全体的な滅亡のうちに倒れるだろう。この点をよく心に留めなさい。亜麻布を着た人による印によって表され、聖霊の力によって彼らのうちに刻まれる真理の純粋な印を受けるのは、教会の中で行われているすべての忌むべきことのために「嘆き、叫ぶ」者たちである。彼らの純潔への愛、そして神の誉れと栄光への愛はそれほど深く、また罪のはなはだしい罪深さをこれほど明確に見ているので、彼らは苦悶し、まさに嘆き叫ぶ者として描かれている。エゼキエル書第9章を読みなさい。

しかし、罪と義との広い対照をこのように見ず、また、神の勧めのうちに立って印を受ける者のような心を持たないすべての者に対する一斉の殺戮は、滅ぼす器を携える五人への命令の中にこう記されている。「彼の後に続いて町の中を通り、撃て。あなたの目を惜しむな、憐れむな。老人も若者も、処女も、幼子も、女も、ことごとく殺せ。ただし、印のある者には近づくな。わたしの聖所から始めよ。」

『証言』第3巻、266、267。